

新撰万葉集

—「恋」をテーマにした日本漢詩—

大戸 温子

1. 『新撰万葉集』の研究意義

古代より、日本文学が中国文学に大きな影響を受けてきたことは言うまでもないが、日本人が中国文学を真似て創作した漢詩には、中国人には作ることのできない「日本人らしさ」が残されている場合がある。この「日本人らしさ」は、和習もしくは和臭と呼ばれ、「日本人特有の誤り」と称されることが多いが、この和習を一つずつ見ていくと、当時の日本と中国の、様々な違いが見えてくる。

私は中国と日本の、古典文学における大きな違いのうち、以下の二つの点に注目している。一つは、文学における女性の位相の差異である。中国古典文学では、一般に女性は文学を作る立場には立たない。詩を作るのは主に男性である。一方日本では古来より、女性が文学の作り手として活躍している。和歌、物語、様々な分野で活躍した女性作者の名前が今に伝わっている。しかし注意すべき点は、当時女性が文学の発信者となることのできる環境であった日本でも、中国より入ってきた漢詩は「男性の文学」とみなされていた点である。

もう一つは、恋歌に対する評価の違いである。日本では恋歌は文学史上大きな存在ということが出来るが、中国では恋をテーマとした作品は、文学の場においてあまり重要視されてこなかった。

以上の二点を踏まえた上で『新撰万葉集』の特徴を考える。『新撰万葉集』には、まず恋の部立てがある、という特徴がある。ここでは和歌の恋歌を、漢詩に翻案している。この恋部の漢詩は主に中国の閨怨詩の影響を受けている。閨怨詩とは、男性と離れ

て独りである女性の寂しさを描いた詩で、作者は男性である。男性が女性の気持ちになり詠んでいるものや、悲しさに沈む女性を外側から詠物的に詠んだものなどがある。これに対し、日本の和歌は、女性が作者となることができた。女性が女性自身、自分自身の気持ちを歌に表すことができ、時にそれは手紙のような役割を果たすこともできた。

私は『新撰万葉集』の恋部において、男女共に自身の気持ちを表現することのできる日本の恋歌が、男性が女性を描くという姿勢で描かれた閨怨詩を使い、どのように表現されているのか、特にその和習が表れている部分を詳しく見ていきたいと思う。

2. 『新撰万葉集』「恋」部の詩語

2-1. 詩語の用例調査と分類

『新撰万葉集』恋部の詩語を一つずつ調査し、まず中国詩に用例のあるものと、中国詩には使われていない和習的なものとの二種類に分けた。

次に用例のあるもののうち、特に「閨怨詩に用例のあるもの」と、「閨怨詩以外の詩に用例のあるもの」に分類する。

中国詩に用例のない和習的なものは、その詩語の作られ方から、以下の三類に分類した。

一つ目は「言葉は違うが閨怨詩のモチーフを使っているもの」。「蜘蛛」を例に挙げる。「蜘蛛」とは蜘蛛の糸のことだが、蜘蛛の巣がかかる荒れ果てた部屋の中で女性が独り男性の訪れを待つ、というモチーフは『玉臺新詠』の中に四例見ることが出来る。

王僧孺「春怨」『玉臺新詠』卷六

萬里斷音書	十戴異棲宿	彼からの手紙が途絶え、
積愁落芳鬢	長啼壞美目	悲しみのせいで、美しい髪も顔も台無しになってしまった。
君去在榆關	妾留住函谷	君は榆關にいて、私は函谷にいる。
惟對莫邪房	如見蜘蛛屋	瓦松の生えた家、蜘蛛の巣の張った部屋を眺めている。
獨與響相酬	還將影自逐	物音に返事をしたり、自分の影を追いかけてたり。
……（以下省略） ¹		

「蜘蛛」という詩語は閨怨詩の中に見つけることが出来ないが、その発想となるモチーフは右に見たように閨怨詩の中にある。このようなものを、まず一つ目として分類する。

二つ目の分類は、「意味を転換して使っているもの」。言葉としては存在するが、中国詩ではこのよう

な意味では使われていない、というもの。例えば「敗心田」。「心田」「敗田」それぞれの詩語が中国詩の中に用例が見つけられるが、「敗心田」という表現は見つけられない。中国の用例では、「心田」はもと仏教語で心を指す言葉。「敗田」は田畑が崩れ荒れ果てるさまを表現している。心がぼろぼろに崩れさる様を、「心田」と「敗田」を組み合わせることで表現した

と考えられる。他の例としては、「胸中刀火」。「刀火」は身を苦しめるものとして用例があるが、胸中に刀火があると表現し、心の苦しさを表す例は、中国詩の中には管見の限り見つけられない。

三つめの分類は「造語と思われるもの」。「呑心」「表肝」「恋緒」などが挙げられる。以下、この分類に従い表にまとめたものを記載する。

***用例のあるもの**

① 閨怨詩に用例のあるもの	閨房、閨房、空房、荒庭、独居、蕭郎、蕩子、佩響、粉黛、恩情、引領、嘆息、怨恨、怨緒、思緒、万緒 容顔枯槁、忍、含情、恋情、恋慕、積恋、飲涙、恨来、守貞、寂寞、潜然、
② 閨怨詩以外の詩に用例のあるもの	相逢、相待、屈指、厭、中心 無限、零零、寒歳、劬勞 星霜 咄来

***用例のないもの**

③ 言葉は違うが閨怨詩のモチーフを使っているもの。	蜘蛛、袖紅、雁札、履音、涙作泉、面頰、体貌零、捐鏡
④ 意味を転換して使っているもの。言葉としては存在するが、中国詩ではこのような意味では使われないというもの。	敗心田（心田、敗田はそれぞれ用例がある。心田は仏教語。） 心灰（心が動かず静かである様子。荘子に典故がある） 胸中刀火（刀火は身を苦しめるものとして例があるが、胸中にある刀火の例は未見） 落涙成波（涙が波になるという表現は未見） 契約（男女の約束の意で使われる例は未見）
⑤ 造語と思われるもの	呑心、表肝、胸火、怨殺（詩に使われるよう例は明代のもの一例しか見つかからない）、恋緒、恨来、咄来、手算、独寝（詩の用例は未見）

2-2. 分析

これらの詩語を分析する。

閨怨詩の影響を受けている詩語は、直接閨怨詩の詩語を使う①と、閨怨詩のモチーフを利用している③である。これらの詩語を見ると、「閨房」「空房」「蜘蛛」「荒庭」などの場面を設定する、または描写する詩語、「引領」「面頰」「捐鏡」などの人物の動作や様態を描写する詩語、「怨緒」「思緒」などの心を表わす詩語など、様々なものが見られる。

これに対し、本来別の意味で使われている言葉を組み合わせるなどして創られた④、中国詩にはない新しい言葉を創り出した⑤など、閨怨詩の影響を受けていないもの、『新撰万葉集』の詩の作者が独自に作り出した表現を見ると、「敗心田」「心灰不挙煙」「胸中刀火」「落涙成波」「呑心」「表肝」「胸火」など、こちらは人物の心を表現するものが多いことに気づく。

中国閨怨詩①で人物の心を表現している詩語には「引領、嘆息、面頰、捐鏡、容顔枯槁、体貌零」などの詩語がある。これらが姿や動作など、外側から目に見える動作や状態の描写により、「悲しさ」を表現しようとしているのに対し、『新撰万葉集』の作者が創り出した言葉には「敗心田、心灰不挙煙、胸中刀火、落涙成波、呑心、表肝、胸火」など、見えない心の中を直接描き出そうとするものが多い。閨怨詩に用例のある詩語で心を表現しようとするものには、「怨緒、思緒、万緒、恋情、恋慕、積恋」などがあるが、④⑤の詩語「敗心田、心灰不挙煙、胸中刀火、落涙成波、呑心、表肝、胸火」などをこれらと

比べると、『新撰万葉集』ではより心の中を詳細に具体的に表現しようとしていることがうかがえる。

2-3. 結論

『新撰万葉集』の恋部の詩は、積極的に閨怨詩の場面設定やモチーフを使っているが、心情表現の部分では、閨怨詩にはない独自の言葉や表現方法を使い、心を描写するものがある。

そこには、男性が女性を描く中国閨怨詩と、女性自身も自分の気持ちを表現する文学環境をもっている日本との、違いによるものがあるのではないだろうか。中国閨怨詩では、男性が女性を描いている。美しい花を詠むように、外から見た様子を描き、そこから彼女の心を想像して描いていく。一方日本では、女性自身が自らの気持ちを表現することができる環境があった。自分の気持ちを表現する際、他人からは見えない心の中を描き、それを人に伝えようとする。「女性が自分自身の気持ちを表現する」ことができる日本で作られた閨怨詩だからこそ、「人からは見えない心の中を生々しく表現しよう」とした。その時、満足する表現を中国閨怨詩の中に見つけることができず、中国詩にはない表現＝和習を使い表現したのではないだろうか。

注

1 その他の用例を以下に挙げる。

呉均「雜絕句四首」『玉臺新詠』卷10「蜘蛛檐下挂 絡緯井邊囀 何當得見子 照鏡窓東西」

簡文帝「和蕭侍中子顯春別四首」『玉臺新詠』卷9「蜘蛛作
糸滿帳中、芳草結葉当行路」
張協「雜詩」『玉臺新詠』卷三「君子從遠役 佳人守營獨 離
居幾何時 鑽燧忽改木 房櫳無行迹 庭草萋已綠 青
苔依空牆 蜘蛛網四屋…（以下省略）」

おおど はるこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 比較社会文化学専攻